

七不思議

み な と

七不思議は名所舊蹟の獨占か、妖怪變化の爲す業と定まつて居たのは昔の物語、此の科學が進歩したる今日には、何の不思議があるべきかと一笑に付せられる程、文明の空氣は彌蔓して居る時、かゝる問題を擔ぎ出すは物狂ひか、物數寄か、さても不思議なることではある。

不思議なる者が、不思議な事を、茲に描出するは、愈々以て正氣の汰沙でない。大方夢？併し諸君、夢にも正逆の二つあることを夢忘れ賜はず若し一つにても御心當りあらば御用心が肝要。

第一 新らしきもの當園には堅く

御斷り申候

例に依つて、刺を通して參觀を乞ふた。導かれて應接室に入る。園長？私を遇する至れり盡せりで

ある。部下の先生又一々來つての御挨拶は實に物體ない感がした。

愈々會集が始まるとの部下の御案内に急いで、遊戯室に行けば、幼兒は愛らしき笑みを湛えて、私を迎へた。園長は私を幼兒に紹介して「今日はお客様が皆さんの御行儀を見に入らした。さふの様に騒いではいけませんよ。お手を膝にのせて、ちやんとしておいでなさい。」私は身の縮まる程、情けなくなつた。

唱歌は朝の挨拶から始めて三つ計り、遊戯は「桃太郎」「かりくくわたれ」。「かちく山」。これで會集は了りましたとお話。何か貴園で、近頃お教へになつた唱歌か遊戯を見せて頂きたいとお願ひすると、園長は「人が新しいものを能く教へた

がりますが、私は好みません。矢張り古くからあるものは宜しいと思ひます。先づこれで此園の大半は窺ひ得た。

自由遊戯に移つた。砂場に杓子が五つ、かけ椀が三つ、早い者勝ち、奪ひ合ひが始まる。泣く、怒る、保母に見えて居るのか、恬として知らざるもの、如く、外には何にもこれと云ふ遊具もなく保母が二人彼方で互に笑ひ興じて語る、話題はそも何？ 一人の老いたる保母はお室に入つて、椅子に凭れて、二三の子が其側に遊ぶ。先生の目は幼児の上には注いで居ない。園長先生、頻りに私を應接室に導かうとする。私は特に之れを辭し一時間余、現状維持で室に入る。一の組の積木は唯幼児の爲す儘、別に導くのもなければ、出来上つたものを見て、奨勵するのでもなし。二の組では、繋ぎ方、これは又先生一人で立ち廻り、痒い所に手が届き過ぎる活動振り？ 幼児は舟か電車に乗せられて夢我夢中に一つ物が仕上がる。

先づ此の位にして、後は園長の御高見を承らんと應接室に入れば、茶菓既に予を待つこと久しいふ有様。感謝の意を表して、座に着く。そこへ幼児の母親が来て園長と語る。可なり富豪の家の主婦らしい。下へも置かぬ應對振り、其手腕は確に保育の實際より以上であつた。

客辭してから、園長と私と二人。種々と過去の歴史から變遷を承る。園風より保母間の交際、執務の狀況を推測して、不文律を成文にして見ると次の様である。

一 當園は創立以來の因襲に據り、世と推移せざるを以て特長とす。

(註) 進歩的になさんには、頭腦を惱まし、時間を費し、面倒限りなし、古きに習ふときは身を安逸に置き、極樂に居るの感あり。

二 幼児の取扱ひ、紛雜に陥らんとする時は、何時にても唱歌を以て防ぐべし。

(註) 朝、會集するときにも、保育室にある時

も、其出入も、歸宅せしるにも、唱歌を以て充たしむる時は、實に易々樂々なり、決して分量を云爲し、聲帯の顧慮は無益とす。

三手技は可成準備の取らざるものを選ぶべし。且手技を課する場合は、幼兒の力を用ふる時は、事面倒にして、紛雜し易し、須く其大部分は準備し置き、幼兒の爲すべき部分を、少くするを肝要とす。

(註)準備多ければ、吾等の歸宅も早く、雜談に時を移すも、思ひの儘なるべく、幼兒の力を多く用ゐざれば、氣苦勞もなく、室内保育の時間も少なく。後は自由に遊ばしむるを得。

四談話は同じ材料を繰返すも可なり、材料なき時は自由に遊ばしむべし。

(註)材料の選擇は面倒故に、お伽噺の書物其儘の順にて、二三冊用意しあれば、之れを使ふべし。

自然界の話等は六ヶ敷故以ての外なりと心得べし。

五職員は毎朝一人づゝ早出をなし、其他は時間に間に合ふを度とす。

(註)時に出揃はざれば、始業時を延ばすもよし。室内の整頓、幼兒の監督等は特に申渡されたる時(來客の時)の外爲さるること。

六幼兒歸宅後は保母室にて時々茶話會を開く。

(註)茶菓は順番により擔當すべし。談話は世間話しを第一とし、裝飾品、衣類、等に重きを置き、決して保育談の如き堅苦敷話題は避くるを要す。

七新任者に對しては古參の者より園の習慣を教へ、變りたる意見等あれば、遠慮なく破壊すべし。

(註)特に新しきことをなさんとし、幼兒を思ふこと深きは、吾等の敵と知るべし。宜しく、額に角して、攻め立つることを忘るべからず。

八來觀者及父兄は、極て町重に取扱ふべし。

九研究等の會は本園の方針に悖り、本園の主義を没却するものなるが故に、決して出席するを許さず。

此の九ヶ條の不文律、一々以て意外ならざるはなし。感極まつて、挨拶の辭も出ず、そこゝに園を出て始めて我れに歸つた。